

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 5 月 25 日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2022

課題番号：20K01073

研究課題名（和文）学校博物館の成長のためのパブリック考古学的研究：京都府を中心に

研究課題名（英文）Public Archaeological Research for the Growth of School Museums: Focusing on Kyoto Prefecture

研究代表者

村野 正景（Murano, Masakage）

金沢大学・古代文明・文化資源学研究所・客員准教授

研究者番号：50566205

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、いまや消失の危機にすらある学校所在考古歴史資料について、その保護・活用のために、これまで考古学者の関与が十分でなかった「学校博物館」を対象として、その歴史や現状、活動内容、課題、成長可能性に関する研究をおこなった。コロナ禍の影響があったものの、京都府内30校以上で現地調査が実施でき、学校博物館が学校独自型、地域組織連携型、博物館連携型の3タイプで運営され、それぞれ成長モデルとなりうることを見出した。成果は展覧会、報告書・論文で公開し、また外部が学校に関わる際の行動指針やそのガイドンスを作成した。海外でも学校博物館を確認でき、とくにラテンアメリカ諸国で比較可能事例を多数見出した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

学校博物館は、通常外部者が立ち入ることができない学校の敷地内にあるため、考古学者らが研究対象としにくい。そのため例えば刊行物により戦前の学校博物館の内容を明らかにするといった過去の歴史研究が多かった。それに対し本研究は現役の学校博物館を対象とし、教育委員会や学校と連携を深めて、現場で調査し、現状や課題を明らかにした点で学術的意義をもつ。また本研究は、私たちの教育基盤たる学校の機能に関する研究、あるいはその向上を目指す実践でもある点で社会的意義をもつ。学校図書館と異なり、法的裏付けをもたない学校博物館はまず存在への気づきが重要で、本研究活動がその役割の一端をになった。

研究成果の概要（英文）：In order to protect and utilize archaeological and historical materials in schools, which are now in danger of disappearing, we conducted research on the history, current status, activities, issues, and growth potential of "school museums," in which archaeologists have not been sufficiently involved in the past. Despite the impact of the COVID-19, we were able to conduct field surveys at more than 30 schools in Kyoto Prefecture, and found that school museums can be operated in three types: school's own management type, community organization collaboration type, and museum collaboration type, and that each type can serve as a growth model. The results were published in exhibitions, reports and papers, and guidelines for external involvement with schools and their guidance were developed. We were able to identify school museums abroad, especially in Latin American countries, and found many comparable examples.

研究分野：パブリック考古学

キーワード：学校博物館 学校資料 パブリック考古学 文化資源学 博物館学

1. 研究開始当初の背景

学校には学校文化財と言われる多数の資料が所在する。学校日誌や指導記録のような学校現場で生成される独特の資料や、寄贈によって収集した古文書や民具等、戦後の学校主体の発掘活動等による考古遺物といった様々な地域資料である。しかし近年では毎年 400 校を超える学校統廃合や教育内容の変化等により、その学術的価値すら明らかにされぬまま、資料は散逸・亡失の危機に瀕している。ごく近年になって教育史界や文献史学界は、その対策に動き出した。それでは「考古学者は学校所在資料の保護・活用にいかに関与できるか。」

このパブリック考古学的問いに対する実践的解決行動として、学校博物館の設立ないし再整備による資料の保護・活用に注目した。なぜなら、現役の学校の敷地内に設置され、資料の収蔵、保管、展示、学習などをおこなう機能をもった施設である学校博物館は、考古学界や博物館界であまり知られた存在でない上、多忙な学校教員がその運営に力を割くことは年々難しくなっており、そのため資料の専門家たる考古学者らには、学校現場に入り込んで活動し、資料の保護・活用やそのための知見を普及してほしいといった要請があるからだ。

しかし学校博物館は、埋文センター等の専門機関とは保存や展示条件が異なる。その形態も余裕教室を転用したものや社会科準備室の利用、専用室の新設など様々だ。学校博物館は、いずれも考古学側にとってこれまであまりなじみのない施設で、学校側の要請に真に応えるためには、新たに実践的研究を積み重ねるべき領域なのである。

2. 研究の目的

そこで本研究では、学校博物館にかかる初のパブリック考古学的研究として、近代学校制度の発祥地で、現在も学校博物館の多数確認できる京都府を題材に、学校博物館の現代に至る歴史、課題や成長可能性、考古学者の関与の実現可能性・実施効果性について検討することを目的として研究をおこなった。

換言すれば「学校博物館は、いかにすれば成長できるか？」を主たる問いとし、学校博物館はどのような条件がそろえば資料の保存・活用という潜在能力を発揮できるのか、そのためには、学校博物館は誰がどう設置してきたのか、なぜ必要とされたのか、具体的な活動は何か、持続的運営をなしている館の体制はどうなっているかといった学校博物館設立・運営の経緯や歴史、実態にかかる問いを明らかにすることを目標とした。これを通じ、考古学者がどう学校博物館と関われるか、成長に貢献できるかについて検討した。

3. 研究の方法

(1) 概要調査

本研究では、まず質問票調査や聞き取り、実地調査、文献調査等の手法により、京都府内の各学校の学校博物館に関するデータ収集をおこなった。

(2) 参加型調査

また京都府立鴨沂高等学校の学校博物館作りに参加・協力する研究手法を採用した。具体的には学校での資料整理や研究、学校内での保存・展示の各活動について、企画段階から話し合いによって決定し、学びあひながら、展示活動まで実践し、成果や課題を明らかにしていった。

(3) 比較調査

さらに他地域・他国の学校博物館と比較して、共通性や差異を明らかにする研究手法も採った。学校は世界的に普遍的施設であるため、他国でも学校博物館がある。その比較研究をおこなうための基礎情報収集を文献調査中心におこなった。

4. 研究成果

(1) 基礎データ収集

「学校博物館」の設置は明治時代からおこなわれており(村野 2022)、すでに長い歴史のある実践である。しかし現在は学校博物館という名称はほとんど用いられず、筆者が確認できたのは「郷土室」「郷土資料室」「記念室」等多様な名称である。多様な名はそこに求められている機能や役割が複数あることを反映しており、また全国に目を広げれば、郷土室のような歴史系のほか、絵画作品等を収蔵・展示する美術系、岩石や動植物の模型標本類を多数もつ自然系の学校博物館もあり、さらには水族館同様の施設をもつ例すらあることがわかった。

学校博物館の基礎データとして、京都市内全小学校の悉皆的質問票調査により、全 164 校のうち 64%に設置されていることがわかった(村野他 2021)。なお札幌市では教育委員会らが調査を進め、小学校 111 校、中学校 10 校に郷土資料室

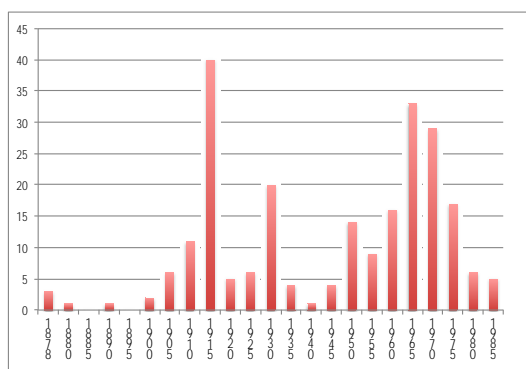


図 1 学校博物館数(縦軸)と設置年(横軸)

や展示コーナーがあり、全学校の4割を占めるというデータを得ている。学校博物館の数を全国的に把握した調査ははまだないが、全国でかなりの数になることが改めて判明した。

また京都市内のデータでは、昭和54年以前に設置年が遡るのはわずか8%にすぎず、2000年以降に設置したとの回答が4分の1近くもあった。近年でも学校博物館の設置が進んでいることが明らかとなった。しかし41%は設置年がいつだったのかという情報が不明となっており、学校博物館に関する情報の継承が難しいことも明らかとなった。教員の異動や生徒・児童の卒業という人の流動性の高さが前提となる組織で、学校所在資料や学校博物館の情報継承にはどうすればよいか。

この問いを念頭に置きつつ、悉皆的質問票調査にもとづく実地調査をおこなった。成果としてまず、京都の学校博物館には資料専用の部屋、部室、ふるさとルーム、校長室、同窓会館、廊下、校舎の外の7タイプがあることを確認した(村野2023)。学校によって成立過程は異なるものの、学校内の教職員だけで設置したタイプはみられず、それ以外の人々の関与のあったことが共通した。もっとも詳細な学校博物館の経緯やその後の歴史がわかる京都市立北白川小学校では、地域住民や育友会が中心となる創立80周年記念事業としての学校環境整備等がおこなわれ、その一環として学校博物館が昭和32年(1957)に設立された。そこには教員が児童らと進めた郷土学習の成果が展示され、またそれがきっかけとなって、梅棹忠夫等に激賞される『北白川こども風土記』の刊行に結びついていた。近年同校では「展示室」がふれあいサロンに隣接して設置され、地域組織と学校が連携して運営されることが期待されている(村野2020)。このように歴史的にみても、学校外部の連携が学校博物館の設置や運営に重要な役割を果たすことが明らかとなった。

(2) 参加型調査による記録

学校博物館の設置にかかる参加型調査では、企画段階から資料の整理・調査、選択、展示に至る各過程の詳細を記録した(村野他2022)。事例は京都府立鴨沂高校の取組であり、筆者が学校と連携して資料の調査・研究や整理を進めてきた学校である。本研究では特に創立150周年を迎える準備として実施した学校内展覧会づくりについて、学校内での展覧会の位置付け、年間計画・授業との関わり、具体的な授業内容、展覧会の内容、生徒・保護者らの意見・感想、教員ら本取組の実践者の所見をまとめた。

(3) 他国の比較事例

学校博物館はSchool Museumとして英語圏でも知られ、例えばジョン・デューイが『学校と社会』の中で扱っている。ただし本研究で注意を引いたのはメキシコや中南米の事例である。メキシコでは1970年に全国の学校に学校博物館を設置するプログラムが実施されており、1982年までに1,000校以上で設置されたという。児童が自ら博物館を作り、企画、展示、運営を担うという一種の作業教育的プログラムで、プロモーターと呼ばれる特別の役職設置や地域住民の参加を必須とする点、コミュニティ博物館として発展していったこと等、日本にない数々の独自の工夫のあることがわかった。文献調査が中心となったため、実地調査は今後の課題である。

本研究を通じ、学校外部の関わりが学校博物館成長の鍵であることが改めて明らかになった。またデジタル技術を活かしたバーチャル・スクール・ミュージアム作りは情報共有・公開の点で今後とくに重点的に検討するべきであることもわかった。

<引用文献>

- 村野正景 2020 「京都市立北白川小学校の郷土室」『学校で地域を紡ぐ』小さき社
- 村野正景・和崎光太郎・林潤平 2021 「学校内歴史資料室についての調査結果と所見」『京都市学校歴史博物館研究紀要』8
- 村野正景 2022 「学校博物館の基礎的研究」『国立歴史民俗博物館研究報告』234
- 村野正景・島田雄介 2022 「学校博物館の事例研究」『朱雀』34
- 村野正景 2023 「京都の学校博物館の「特別公開」」『朱雀』35

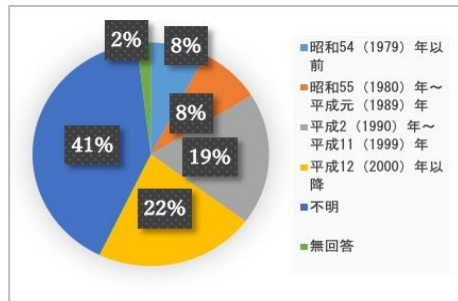


図2 京都市内小学校の学校博物館設置年



図3 京都市立翔鸞小学校の郷土室



図4 京都府立鴨沂高等学校の展示室

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計17件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 Murano, Masakage	4. 巻 -
2. 論文標題 A Study on the Development of Public Archaeology in El Salvador: for making better strategy on improving international cooperation of archaeological activities	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Japanese Contributions to the Studies of Mesoamerican Civilization : the 40th Anniversary of La Entrada Archaeological Project	6. 最初と最後の頁 91-102
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 村野正景	4. 巻 -
2. 論文標題 ソーシャル・キャピタルと博物館-ウイズ・コロナ時代の社会貢献を目指して-	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 資料と公共性 2022年度研究成果年次報告書	6. 最初と最後の頁 22-38
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 村野正景	4. 巻 783
2. 論文標題 学校所在資料の調査・研究について	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 考古学ジャーナル	6. 最初と最後の頁 14-17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 村野正景	4. 巻 35
2. 論文標題 京都の学校博物館の「特別公開」-「京都府内の学校所在資料展2」の記録を兼ねて-	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 朱雀 : 京都文化博物館研究紀要	6. 最初と最後の頁 13-31
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 村野正景	4. 巻 20
2. 論文標題 学校で資料に出会う、気づく:資源化の実際と今後の活動可能性	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 文化資源学	6. 最初と最後の頁 72-85
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 村野正景, 和崎光太郎, 林潤平	4. 巻 8
2. 論文標題 学校内歴史資料室についての調査結果と所見-全京都市立小学校を対象としたアンケート調査-	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 京都市学校歴史博物館研究紀要	6. 最初と最後の頁 3-17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 村野正景	4. 巻 -
2. 論文標題 コロナ禍での博物館活動の焦点は何か:京都文化博物館の努力と工夫	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ICOM Japan ジャーナル	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 村野正景	4. 巻 234
2. 論文標題 学校博物館の基礎的研究-学校資料の所在する場の理解に向けて-	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 国立歴史民俗博物館研究報告	6. 最初と最後の頁 1-36
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 村野正景, 島田雄介	4. 巻 34
2. 論文標題 学校博物館の事例研究-京都府立鴨沂高等学校における展覧会-	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 朱雀 : 京都文化博物館研究紀要	6. 最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 村野正景	4. 巻 -
2. 論文標題 京都市立北白川小学校の郷土室 - 学校博物館の活動とその役割の可能性 -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 学校で地域を紡ぐ - 『北白川こども風土記』から -	6. 最初と最後の頁 167-197
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 村野正景	4. 巻 -
2. 論文標題 『北白川こども風土記』にかかる学校所在資料	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 学校で地域を紡ぐ - 『北白川こども風土記』から -	6. 最初と最後の頁 210-216
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 MURANO Masakage	4. 巻 -
2. 論文標題 Discussing the Roles of the Museum of Kyoto in Contemporary Society	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 City Museums as Cultural Hubs: Past, Present and Future	6. 最初と最後の頁 34-41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 村野正景	4. 巻 -
2. 論文標題 博物館学とパブリック考古学	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 メソアメリカ文明ゼミナール	6. 最初と最後の頁 437-452
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 村野正景	4. 巻 -
2. 論文標題 戦時下の考古学と埴輪の位置	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 さまよえる絵筆 - 東京・京都 戦時下の前衛画家たち	6. 最初と最後の頁 145-147
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 村野正景	4. 巻 -
2. 論文標題 京都府立鴨沂高等学校所蔵の瓦-学校所在考古資料の基礎的研究-	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 持続する志 岩永省三先生退職記念論文集	6. 最初と最後の頁 767-785
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 村野正景	4. 巻 -
2. 論文標題 京都文化博物館と地域コミュニティ-まちづくりを担う博物館-	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 2020年度文化遺産に関わる国際会議 博物館と地域社会	6. 最初と最後の頁 43-55
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 村野正景	4. 巻 33
2. 論文標題 横地石太郎収集の須恵器-京都府立鴨沂高等学校コレクションの基礎的研究-	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 朱雀	6. 最初と最後の頁 13-34
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計13件 (うち招待講演 7件 / うち国際学会 2件)

1. 発表者名 村野正景
2. 発表標題 メキシコの学校博物館プログラム
3. 学会等名 古代アメリカ学会第15回東日本部会/第13 回西日本部会研究懇談会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 村野正景
2. 発表標題 連携事業をどう作るか-博物館のお仕事-
3. 学会等名 第62回まちカフェ「みんなで考える三条通と博物館」 都市博物館活動と地域連携 (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 村野正景
2. 発表標題 学校博物館ーなぜ学校内に博物館が作られたかー
3. 学会等名 ぶんぱく京都講座
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 村野正景
2. 発表標題 みち・まちづくりに資する博物館活動は創造可能か
3. 学会等名 「官民連携まちなか再生」研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 村野正景
2. 発表標題 京都府内の学校所在資料と学校博物館についての調査報告
3. 学会等名 第17回学校資料研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 村野正景
2. 発表標題 学校で資料に出会う、気づく：資源化の実際と今後の活動可能性
3. 学会等名 文化資源学会 特別研究会「学校所在の文化資源」（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 村野正景
2. 発表標題 當代社會中的價值;創造：京都的博物館活動
3. 学会等名 輔大博物館學研究所X文化部X2021-2022年人才培育計畫X系列講座（招待講演）（國際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 村野正景
2. 発表標題 博物館とメソアメリカ
3. 学会等名 第3回公開シンポジウム まなぶ、たのしむ南北アメリカの古代文明-研究成果から学びの場へ- (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 村野正景
2. 発表標題 海外の学校博物館：メキシコの教育プログラムを中心に
3. 学会等名 第18回学校資料研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 村野正景
2. 発表標題 京都市立北白川小学校の郷土室-学校博物館の活動とその役割の可能性-
3. 学会等名 学校資料論『学校で地域を紡ぐ 「北白川こども風土記」から 』発刊記念トークイベント第三夜 (招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 村野正景
2. 発表標題 都市博物館の連携事業-京都文化博物館の事例-
3. 学会等名 京都・大学ミュージアム連携シンポジウム 「コロナ時代の連携 京都・大学ミュージアム連携の10年とその後」 (招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 村野正景
2. 発表標題 京都文化博物館と地域コミュニティ-まちづくりを担う博物館-
3. 学会等名 ユネスコ・アジア文化センター文化遺産に関わる国際会議 博物館と地域社会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 和崎光太郎、林潤平、村野正景
2. 発表標題 京都市学校歴史博物館による「学校内歴史資料室等の有効利用、及び当館との協力事業に関するアンケート」の結果と所見
3. 学会等名 第15回学校資料研究会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 村野正景編	4. 発行年 2023年
2. 出版社 学校資料研究会、京都府立鴨沂高等学校京都文化科	5. 総ページ数 96
3. 書名 「学校博物館」を成長させる-京都府立鴨沂高等学校所在資料の発見と活用 II	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>学校資料研究会 https://gakkoshi.ryo.jimdofree.com</p>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------